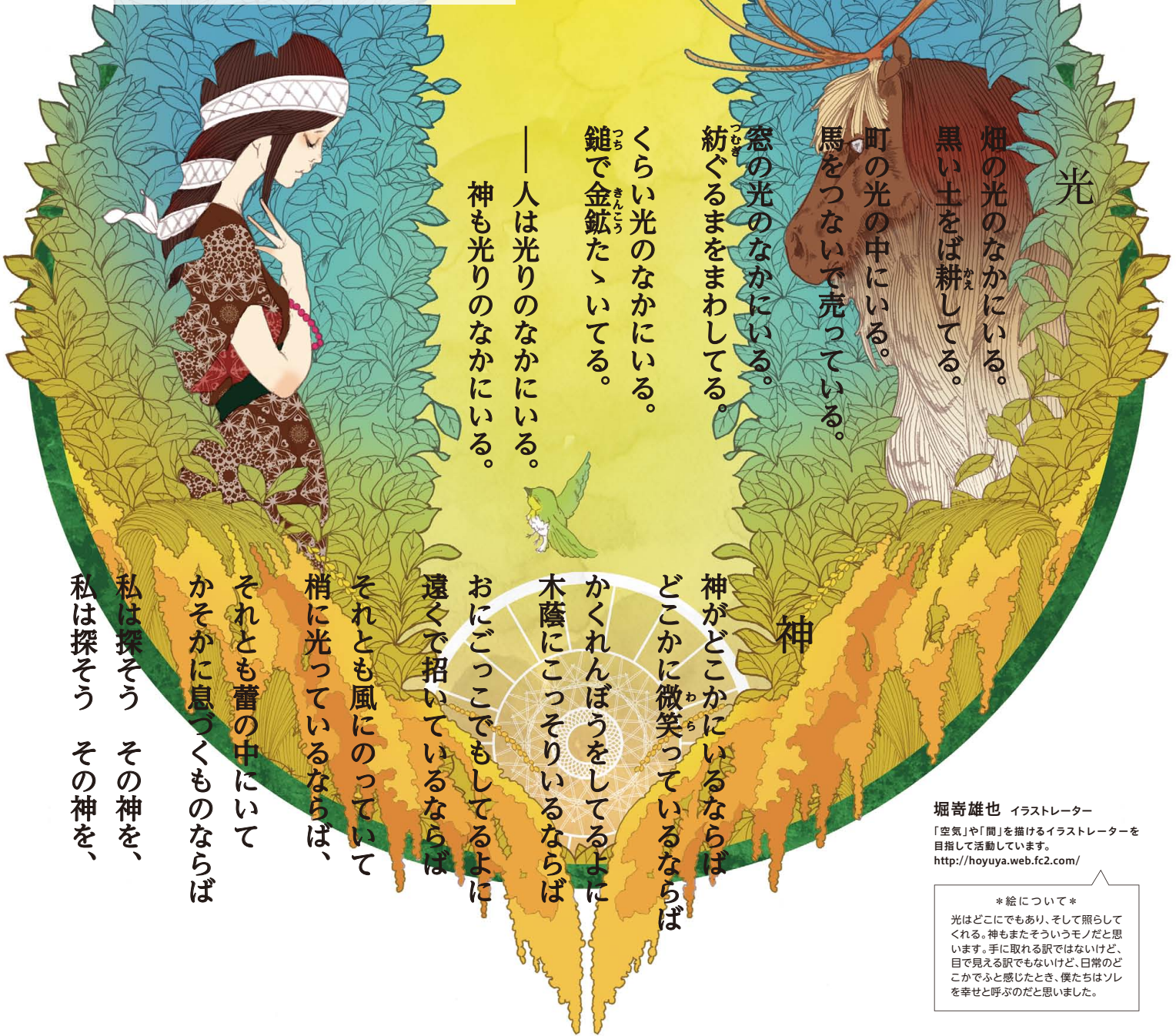




新美南吉と詩

Nankichi × Step

南吉の詩は童話に勝るとも劣らず魅力的。地元を中心に活躍する現代の若手作家たちと詩をコラボレーションしていきます。



光

畑の光のなかにいる。
黒い土をば耕してある。

町の光の中にいる。

馬をつないで売っている。

窓の光のなかにいる。
紡ぐるまをまわしている。

くらい光のなかにいる。
鋤で金鉞たゝいてる。

——人は光りのなかにいる。
神も光りのなかにいる。

神

神がどこかにいるならば
どこかに微笑っているならば

かくれんぼうをしてるよに
木蔭にこっそりいるならば

おにごっこでもしてるよに
遠くで招いているならば

それとも風にのっついて
梢に光っているならば、

それとも蕾の中にいて
かそかに息づくものならば

私は探そう その神を、
私は探そう その神を、

堀奇雄也 イラストレーター
「空気」や「闇」を描けるイラストレーターを目指して活動しています。
<http://hoyuya.web.fc2.com/>

絵について
光はどこにでもあり、そして照らしてくれる。神もまたそういうモノだと思います。手に取れる訳ではないけど、目で見える訳でもないけど、日常のどこかでふと感じたとき、僕たちはソレを幸せと呼ぶのだと思いました。

新美南吉



にいみなんきち (1913-1943)

大正2年7月30日、愛知県知多郡半田町(現・半田市)に生まれる。幼くして母を亡くし、養子に出されるなど寂しい子ども時代を送る。旧制半田中学校卒業後、「赤い鳥」入選を契機に北原白秋や巽聖歌の知遇を得る。昭和18年、結核のため29才で世を去る。

解説

南吉は、宮沢賢治のようにストレートに神仏を信仰することは出来なかったが、折に触れて神や仏に関心を示し、生涯、日記や作品にそれを書き続けた。「神」は「光」の翌年に作られたものである。

南吉19歳の作である「光」は、1933年の「赤い鳥」4月号に掲載されたもので、「赤い鳥」に発表された最後の作品である。

「神」は、神々しい大自然をうたっているわけではない。畑の光のなかに、町の光のなかに、窓の光のなかに、そして暗闇のなか

にさえ人間は、神と共にあるのだ、というのが素朴なとらえ方が、かえってこの世にあるものの全てを、やさしく包み込んでいるようでいい、と思う。

前新美南吉記念館館長
矢口 栄 さん

解説者

半田市、知多市、東浦町の小中学校勤務を経て'04年から'11年まで新美南吉記念館館長を務める。著書「南吉の詩が語る世界」(一粒社出版部)「子どもたちに贈りたい詩」(教育出版センター)「新しい詩の創作指導」(共著・明治図書)ほか。

おしらせ

新美南吉没後71年 命日行事

【期間】3月21日(金・祝)～3月23日(日)
【場所】新美南吉記念館

今年で没後71年を迎える新美南吉の命日(3月22日)を中心に行われる行事。
22日は南吉を偲ぶ会(命日セレモニー)、命日ウォーク、南吉童話お話し会、貝殻笛づくり、蓄音機コンサート、23日は歌とお話の会、みんなで議論「南吉さん!それでもいいの?」などを予定。その他にもあおぞら図書館、各種ワークショップ(500円～)、クイズラリー(100円)を行う。